

コリント
第一
⑧

「自分の弱みを
認識しよう」

コリント人への手紙 I 8章 偶像に捧げた肉

アウトライン

0. イントロダクション

I. イスラエルと偶像礼拝

I. 知識と愛 8章1～3節

II. 愛による自由の制限 8章4～13節

III. まとめと適用

自分の弱みを理解して

あらゆる偶像を遠ざけよう



コリントの手紙とは？

- **著者** …使徒パウロ。
- **年代** …55年頃。 **第3回伝道旅行**の途中。
- **執筆場所** …長期滞在中のエペソ。
この後、コリントを再訪。
- **対象** …コリントのキリスト者たち。
(離散のユダヤ人と異邦人)
- **執筆目的** …過ちを正し信仰の成長を促す。



海を挟んで約250km
陸路を廻れば約1,000km

序文		1:1～9
罪の叱責	①教会内の分裂	1:10～4:21
	②罪に対する懲戒	5:1～13
	③裁判の問題	6:1～8
	④性的放縦の問題	6:9～20
質疑応答	①結婚	7:1～40
	②偶像に捧げた肉	8:1～11:1
	③礼拝における秩序	11:2～34
	④聖霊の賜物	12:1～14:40
	⑤復活	15:1～58
	⑥献金	16:1～12
あいさつ		16:13～24



【当時のコリント】

- アカヤ州(ギリシャ南部)の首都
自由民20万人 + 奴隷50万人 = 計70万人
- 国際都市。ローマ人、ギリシャ人…etc。
かなりの規模のユダヤ人共同体も存在。
- 不道德の代名詞。「コリント人のように」
少年への性愛や複数の愛人も当然。
- 神殿娼婦の存在。偶像崇拜が蔓延。

手紙の背景に、コリントの現状があった



コリントの遺跡
アクロポリスの丘



I. イスラエルと偶像礼拝

モーセの律法授与の間に金の子牛を拝んでいたイスラエル

【聖書における偶像礼拝の歴史】

- 大洪水後、ニムロデが築いた**ダビデの塔**は、これ自体、人間が自分自身の力を誇った偶像だった。
- アブラハムの出身地ウルは、月神礼拝の町。約束の地でアブラハムが最初の礼拝を献げたモレの檜の木は、**カナンの偶像礼拝の中心地**だった。
- ヤコブのおじラバンは、偶像礼拝者だった。
- イスラエルが逃れた**エジプト**は**数百の偶像神の国**。



【律法が厳しく禁じた偶像礼拝】 出 20:4 十戒

「あなたは自分のために**偶像**を造ってはならない。
上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の
下の水の中にあるものでも、いかなる形をも造っては
ならない。それらを拝んではならない。それらに仕え
てはならない」

- 礼拝の対象として偶像を造ることが堅く禁じられた。
- 従えば祝福、背けば呪い。律法は民を導く、飴と鞭。



【指定された動物の屠り場】 レビ17:7

また、彼らが慕って淫行をしていた雄やぎの偶像に、もういけにえを献げなくするためである。これは彼らにとって代々守るべき永遠の掟となる。

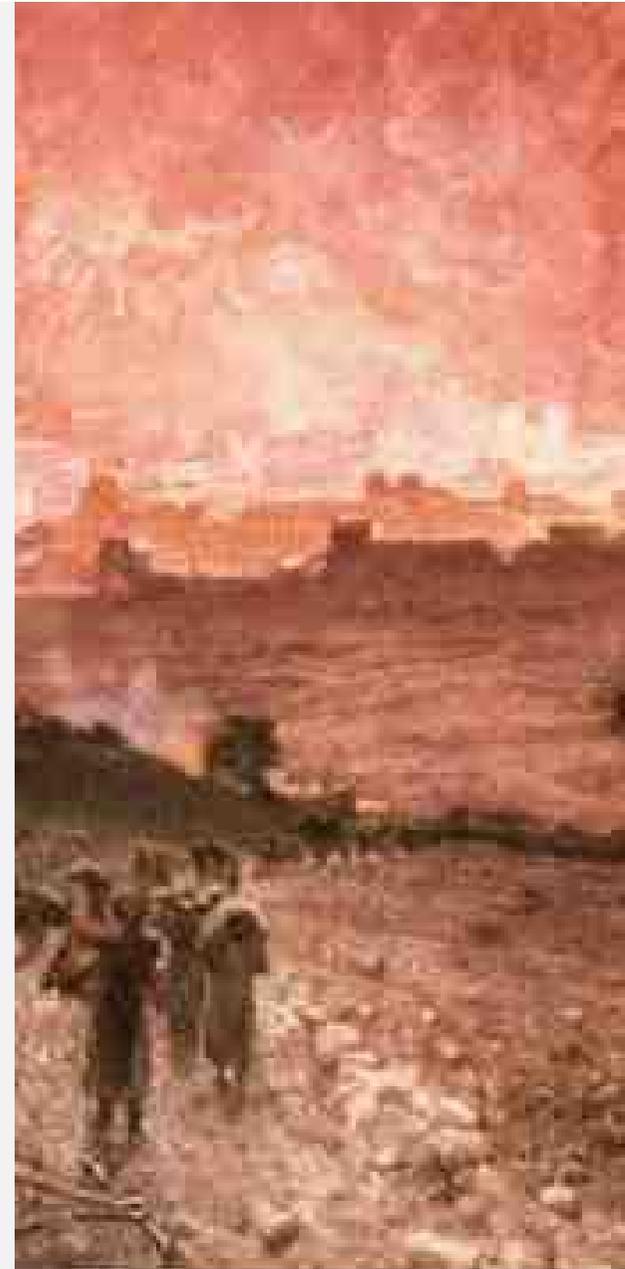
- エジプトで偶像礼拝に親しんでいた民は、モーセがシナイ山に登っている間に、**金の子牛**を造り、拝んだ。
- 動物は、幕屋の前で屠るよう命じられた。
→ 自分たちで勝手に動物を屠ることが、偶像礼拝につながらないように。



【土地の契約・偶像礼拝者への呪い】 申29:20

【主】はその者を決して赦そうとはされない。むしろ、そのとき、【主】の怒りとねたみがその者に対して燃え上がり、この書に記されている、すべてののろいの誓いがその者の上にのしかかり、【主】はその者の名を天の下から消し去られる。

- **土地の契約** (申29～30章)は、イスラエルが偶像礼拝に陥り、神の裁きを受けて約束の地を追われることを前もって警告していた。



【ソロモン王の偶像礼拝】 Ⅰ列11:4

ソロモンが年をとったとき、その妻たちが彼の心を**ほかの神々**の方へ向けたので、彼の心は父ダビデの心と違って、彼の神、**【主】**と一つにはなっていなかった。

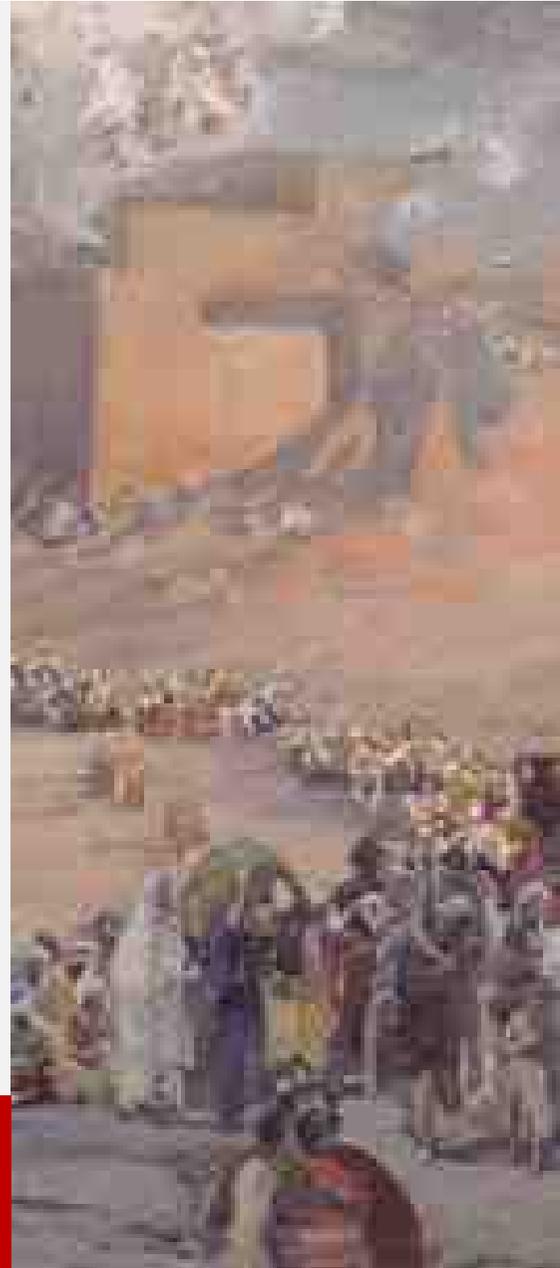
- 政略結婚による多くの異邦人の妻たちの**偶像礼拝**をソロモンは認め、彼自身も取り込まれてしまった。
- この罪のため、ソロモンの死後、王国は南北に分裂。北王国では、ダンとベテルに**金の子牛**が設置された。



【イスラエル、ユダの滅亡】

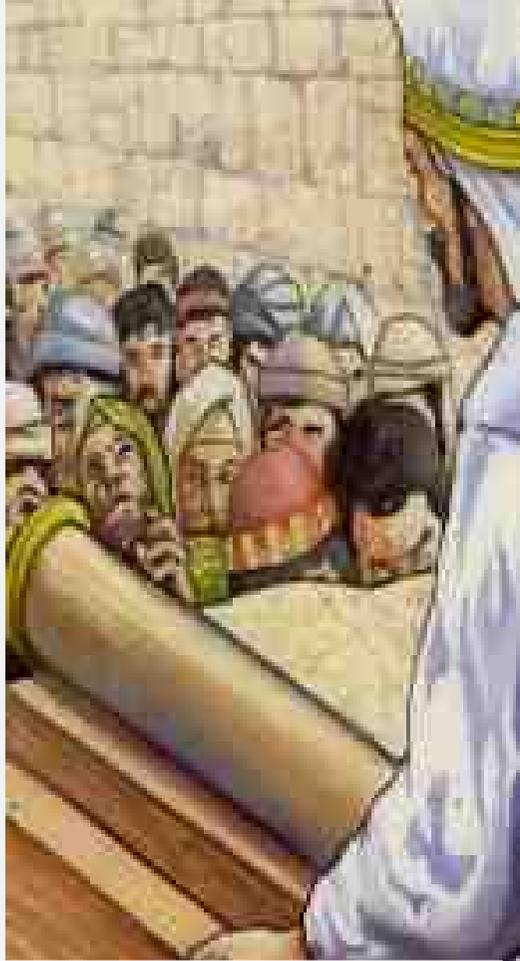
- まず北王国が**偶像礼拝**に突き進んだ挙げ句、滅亡。
- 南王国には、主に従う善王もいたが、**偶像礼拝**の流れを押しとどめられず、人身供養まで行った最悪の王マナセの時に、神の裁きが決定。
- BC586年、バビロニアにより**エルサレム陥落**。
都の要人たちは、バビロンに連行(バビロン捕囚)。

民は偶像礼拝の罪の重さを身をもって知った



【帰還後のイスラエル】

- バビロニアの滅亡後、帰還したイスラエルの民は、神への忠誠を誓い、**律法**を読み上げ、再出発した。
- 二度と律法を破るまいと決意したイスラエルだが、予防線として**口伝律法**が生まれ、余計な教えが大量に付加されていった。➡パリサイ派の誕生。
- 旧約聖書と新約聖書の間の数百年の中間時代。人々は、**口伝律法**にがんじがらめになっていた。



偶像礼拝からは離れたけれど…

【イエスの時代のイスラエル】

- イエスが最も激しく対立したのが、パリサイ派。
彼らは、**口伝律法**を全否定したイエスを拒絶した。
→すでに避けられていた**偶像礼拝**は争点にならず。
- イエスが十字架の贖いの業を成し遂げた時、**律法**は成就し、その役割を終えた。
- 聖霊が降り、**教会時代**が始まった。
→異邦人世界へ福音が急拡大する中で、**偶像礼拝**が、大問題として再び立ち上がった。

異邦人には盲点



【エルサレム会議の決定】

- 同胞からの迫害に散らされる形で宣教は拡大。
第一回の宣教旅行では、多くの異邦人が救われた。
- 使徒と長老たちのエルサレム会議で、異邦人信者は、ユダヤ人の慣習に従う必要はないと決議された。
- **ユダヤ人伝道への配慮**として、以下が告げられた。
使15:20 ただ、偶像に供えて汚れたものと、淫らな行いと、絞め殺したものと、血とを避けるように、彼らに書き送るべきです。





Ⅱ. 知識と愛 I コリント8章1～3節

【知識と愛】 | コリント8:1~2

次に、偶像に献げた肉についてですが、「私たちはみな知識*を持っている」ということは分かっています。しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。

*グノーシス …10/90は、コリント書第一。

■グノーシス主義 → 教会初期の代表的異端。

霊肉二元論。高位の霊は下位の肉の影響を受けない。

→メシアの受肉。文字通りの神の国の成就も否定。

■“救われた魂は自由だから、何をしても問題ない”

→偶像にささげられた肉を食べても問題ない。

知識を誇る
信者が多かった？

理屈はそうだが
愛の観点では？



【知識と愛】 1コリント8:2~3

自分は何かを知っていると思う人がいたら、その人は、知るべきほどのことをまだ知らないのです。

しかし、だれかが神を愛するなら、その人は神に知られています。

■ 知識を誇る者は、主を離れ、自分自身を誇っている。
本当の意味では、主を知らない。

■ 己の罪を知り、主を愛する者は、主に知られている。
「知る」とは一体化。信者は神と一つになっている。

パウロはまず
愛と知識の
原則を語る

真実に知るのが愛。愛とは相互の関係性。





Ⅲ. 愛による自由の制限 I コリント8章4～13節

コリントの浴場跡のモザイク

【唯一の神を知った者たち】 | コリント8:4

さて、偶像に献げた肉を食べることについてですが、「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」ことを私たちは知っています*。

*ユダヤ人が歴史を通して思い知らされたこと。

(バビロン捕囚以降、偶像礼拝からは遠ざかった)

■さらには、主イエスの福音を信じ、新生し、聖霊が内住され、真実に**主を知る者**とされた。

→福音を信じて救われたことが、議論の前提。



神殿のグリフィン像

【天地万物の造り主】 | コリント8:5

というのは、多くの神々や多くの主があるとされているように、たとえ、神々と呼ばれるものが天にも地にもあったとしても*、私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、この神からすべてのものは発し、この神に私たちは至るからです。

*偶像の神が、背後に働くサタンや悪霊によって、何らかの現象を伴うこともある。

■現象に惑わされず、ただ真理に立ち続けること。
求められるのは、天地万物を造られた主への信頼。



【唯一の主・メシア】 1コリント8:6

また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、この主によってすべてのものは存在し、この主によって私たちも存在する*からです。

*“わたしはある” …主の御名は**全存在の根源**を示す。

主イエスも“エゴ・エイミー(わたしはある)”と宣言。

(マルコ14:62他)

■メシア、イエスは、存在の根源、唯一の神であると、明確に宣言するパウロ。



【元・偶像礼拝者たち】 1コリント8:7

しかし、すべての人にこの知識*があるわけではありません。ある人たちは、今まで偶像になじんできたため、偶像に献げられた肉として食べて、その弱い良心が汚されてしまいます。

*偶像の神は存在しない。存在するのは唯一の神のみ。

■偶像礼拝の恐ろしさが身に染みていないのが異邦人。

→偶像を避けてきたユダヤ人との大きな違いが!!

■偶像に浸りきっていた者が、その肉を食べる危険性。

例) 霊的世界を描いたアニメにはまり、離れた信者。



一連の議論は
異邦人信者に
配慮するもの

【ささげものの原則から】 1 コリント8:8~9

しかし、私たちが神の御前に立たせるのは食物ではありません*。食べなくても損にならないし、食べても得になりません。

ただ、あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまづきとならないように* 気をつけなさい。

*メシアの贖いは成し遂げられた。動物の犠牲は不要。

■偶像にささげられた肉を食べても汚されはしない。

*偶像に浸ってきた人々への配慮は必要。



【信仰の幼子への配慮】 | コリント8:10

知識のあるあなたが偶像の宮で食事をしているのをだれかが見たら、その人はそれに後押しされて、その良心は弱いのに、偶像の神に献げた肉を食べる*ようにならないでしょうか。

*偶像礼拝に浸ってきた者が元に戻るのは簡単。

その肉を食べることで信仰が後退する危険性が。

例) アルコール依存症者は、一口飲むのも危険。

→ 聖餐式にぶどうジュースを使う理由の一つ。



【想定される最悪の事態】 | コリント8:11

つまり、その弱い人は、あなたの知識によって滅びることになります。この兄弟のためにも、キリストは死んでくださったのです。

■ 信仰が後退した人は、不信仰者と見分けがつかない。

→ 最悪の状況は、その人が本当は信じていない場合。

その人を待つのは、**永遠の滅び**。

■ その人の魂の救いのために最善を尽くすことが、私たちクリスチャンに与えられた使命。

優先すべきは
私の嗜好ではなく
その魂の救い



【キリスト者の責任】 1コリント8:12~13

あなたがたはこのように兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を傷つけるとき、キリストに対して罪を犯しているのです。

ですから、食物が私の兄弟をつまずかせるのなら、兄弟をつまずかせないために、私は今後、決して肉を食べません*。

*パウロが示した、伝道者の覚悟。優先順位。

■ 信仰者に担わされた責任から問われる。

私の行動が、他者の救いの妨げになっていないか？

人を救いに導く証しを立てているだろうか

第一は常に福音宣教





IV. まとめと適用

自分の弱みを理解して
あらゆる偶像を遠ざけよう

【偶像にささげられた肉の禁止について二つの背景と理由】

■エルサレム会議の結論

→**偶像を忌み嫌うユダヤ人**への配慮。(信者も未信者も)

★昔からの慣習を守るユダヤ人への伝道の妨げとならないように。
ユダヤ人信者と異邦人信者の間に溝が生まれないように。

■コリント第一8章のパウロの結論

→**元・偶像礼拝者だった異邦人信者**への配慮。

★かつて偶像礼拝に浸っていた者の信仰が後退しないように。
本当は信じていない人が滅ぶという最悪の結果を避けるために。

【私たち異邦人が胸に刻むべき、偶像礼拝の危険と罠】

- 文化も習慣も、まるごと**偶像礼拝**に浸っていたのが異邦人。
無意識に自動的に身につくのが文化。その現実を踏まえよう。
➔ 私たち異邦人信者には、根強く残る**偶像礼拝**の影響がある。
- アルコール依存症者が、一口の酒で元に戻ってしまうように、
ささいな**偶像礼拝**の要素が、私たちの信仰を後退させる時がある。
- 弱みに関して、ちょっとだけなら大丈夫とは、決してならない。
自分の弱み、兄弟姉妹の弱み、正しく認識しているだろうか？

【現代的な偶像礼拝について認識しよう】

■ 昔からの偶像は分かりやすい。問題は現代的な偶像礼拝。

例) 物に命を吹き込む**アニメ**は、元来、偶像礼拝と親和性が高い。
お金、性、宇宙も、現代人の多くにとっての偶像だろう。
悪の存在を騒ぎ立て、それに心が占められているなら？

■ パウロが言うように、信仰者の心は自由。何者にも束縛されない。
一方で、肉体ある私たちには、以前からの変わらぬ弱みがある。

■ 自分の弱みを軽視せず、認識し、悪影響を与える物を遠ざけよう。
信仰の兄弟姉妹に対して、必要な忠告と配慮を与えよう。

【聖化の過程を歩み続け、自分の身をきよめていこう】

- 信仰が成長していけば、不要な物は手放されていっているはず。あなたの日々の習慣は、変化してきているだろうか？
- 自分の信仰を証明するのに、わざと世のことに浸る必要はない。むしろ、他者の証しとなる行動を心がけることが求められている。
- 何よりもまず第一に、御言葉に親しみ、学び、血肉としよう。主を知るほどに、この世のものは虚しく、価値を失っていく。

ますます喜んで御言葉を学び、主に浸り、主を証しして行こう

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの罪(つみ)を贖(あがなう)うために十字架で死に、

②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、

③三日目に復活(ふっかつ)したことを信じます。

無意識(むいしき)に浸(ひた)っていた偶像礼拝(ぐうぞうれいはい)に、
舞(ま)い戻(もど)ることのないように おまもりください。

罪を遠(とお)ざけ、この身を 魂(たましい)を み心にかなって
きよめていくことが できますように。

ますますよろこんで みことばを学び、主を知る真実(しんじつ)の
知識(ちしき)で、満たされていきますように。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」